

No.J2119

ハレルヤ村の漁師たち：スリランカ・タミルの村 内戦と信仰のエスノグラフィー

九州大学 広報本部サイエンスコミュニケーター

初見 かおり

本出版助成は、スリランカ内戦の犠牲者とその家族の戦時中と戦後の姿を描いた文化人類学のエスノグラフィーである。「タミル解放のトラ」という言葉、コロンボでのテロのことなど、三十年近くに及んだスリランカ内戦についてわずかしか知らない読者にとって、本書は、平和とは何か、内戦とは何か、苦しみの中にあつてなお生きるとは、などについて考えるきっかけとなる。また、文化人類学に関心のある若者が、その具体的な過程と成果について、時間をかけて他者を理解することの大切さについて知ることにつながる。著者がコロンビア大学の博士論文調査のためにスリランカを訪れていた二〇〇六年八月から二〇〇九年五月にかけて、ちょうどスリランカ北部では、政府軍と「タミル・イーラム解放の虎」(LTTE)と呼ばれるゲリラ軍の間の最後の戦いが、四十万人もの一般市民を巻き込んで繰り広げられていく。死者が最も多く出たのは、二〇〇八年十二月から二〇〇九年五月の最後の六カ月間で、この間だけで国連発表で四万人が死んだ。実際の死者の数は不明で、行方不明者も含めると十万人もの人が、戦後無人の地となったヴァンニ地域から出てこなかった。

著者の調査地の「ハレルヤ村」は、一九九九年に、ゲリラ軍が支配する北西部沿岸の漁村から政府軍支配下の内陸部に避難してきたタミルの漁師たちが暮らすキャンプである。二〇〇七年の夏に内戦が激化したとき、村の半分は「ハレルヤ村」に避難せず、ゲリラ軍支配下の母村に残っていた。彼らがその後、どのようにヴァンニの戦場で死に直面したのか。政府軍による無差別爆撃、ゲリラ軍による徴兵や連行や殺害、そして餓死。そういった人間同士の殺し合いの悲劇の渦中を生きてきた漁師たちの世界観、宗教観を描く。

◆第1部 ハレルヤ村との出会い

一、行き止まり 二〇〇六年夏

二、最大の問い 二〇〇七年夏

◆第2部 ヴェラ家と周辺の人びとの物語

三、バトル・オヴ・ヴァンニ 二〇〇九年四月

四、クエートから届いた枢 二〇〇九年十月～十一月

◆第3部 シシリア婆さんの帰郷

五、不思議な行進 二〇一〇年三月

六、イエスの枢 二〇一〇年四月

参考文献・読書案内

あとがき